

研 究

母親の養育態度が幼児の睡眠習慣に及ぼす影響

服部 伸一¹⁾, 足立 正²⁾, 三宅 孝昭³⁾
北尾 岳夫⁴⁾, 嶋崎 博嗣⁵⁾

〔論文要旨〕

母親の養育態度と幼児の睡眠習慣との関連について検討するために、幼児を持つ保護者119名を対象に質問紙調査を実施した。母親の養育スタイルは、4類型（無関心、寛大、権威的、指導的）に分類された。

その結果、休日については、起床・就寝時刻とも群間に有意差が認められ、「指導的」群は「無関心」群および「寛大」群に比較し、起床・就寝時刻が早くなっていた。また、「無関心」群および「寛大」群は、「指導的」群に比し、平日と休日の就寝時刻の差が大きくなっていた。

以上より、母親の養育態度は、幼児の睡眠習慣に影響を及ぼす可能性が示唆された。

key words : 幼児, 睡眠習慣, 母親の養育態度, しつけ不足睡眠障害

I. はじめに

筆者らは、前報¹⁾において、保育所児の就寝時刻は、母親の通勤時間、帰宅時刻および夕食開始時刻などの労働に関わる時間的条件の影響を受けること、また、父親の平日の帰宅時刻が遅く、十分に育児に関われない実態があり、そのことが子どもの遅寝の原因となっている可能性を指摘した。

鈴木ら²⁾が実施した現代の親子に対する保育者の意識調査によれば、「親から寝る時刻を指示されている子どもが多い」（幼稚園教諭群16.5%，保育士群8.7%）、「親は子どもの寝る時刻に関心がない」（同33.5%，47.3%）とあり、子どもの睡眠に対するしつけ意識が希薄な親が増えていることが報告されている。近年の生活の夜型化傾向の中で、親の子どもの睡眠に対する意識が低下し、子どもと大人の生活時間を区別するという感覚が薄れつつあることが懸念さ

れる。

これまでの先行研究において、子どもの睡眠習慣と親の関わり方との関連は十分に検討されておらず、労働時間や育児時間などの外的要因のみならず、親の心理社会的要因をも踏まえた分析が必要であると考ええる。

以上より、本研究では、母親の養育態度が子どもの睡眠習慣にどのように関与するのかを探索的に検討することを目的として、調査を行ったので報告する。

II. 方 法

1. 調査対象

平成18年2月に、兵庫県T市M幼稚園の4～6歳児を持つ母親119名を対象として、機縁法³⁾による質問紙調査を実施し、欠損値のある回答を除く115名（平均年齢33.5±4.6歳）を分析対象とした。対象となる幼児の性別、年齢別人数割合、兄弟数、出生順位、母親の年齢分布をま

Influences of Mothers' Parenting Attitudes on Infantile Sleeping Habits (1852)

Shinichi HATTORI, Tadashi ADACHI, Takaaki MIYAKE, Takeo KITAO, Hirotsugu SHIMAZAKI 受付 06. 8. 29

1) 関西福祉大学（研究職） 2) 倉敷市立短期大学（研究職） 3) 大阪府立大学（研究職） 採用 07. 1. 15

4) 滋賀女子短期大学（研究職） 5) 兵庫教育大学（研究職）

別刷請求先：服部伸一 関西福祉大学 〒678-0255 兵庫県赤穂市新田380-3

Tel : 0791-46-2525 Fax : 0791-46-2526

とめ, 表1に示した。まず, 母親の年齢について, その年齢分布を5歳ごとの階級に区切り, ベネッセによる全国調査⁴⁾と比較した。その結果, 「21～25歳」が5.2% (ベネッセ, 1.0%), 「26～30歳」15.7% (同13.2%), 「31～35歳」

47.0% (同46.3%), 「36～40歳」22.6% (同28.7%), 「41歳以上」が7.0% (同7.6%) となり, 全国データとはほぼ同様の分布傾向を示した。

出生順位についても同様の方法で比較したところ, 「1番目」47.0% (ベネッセ, 54.4%), 「2

表1 基本的属性

人数 (%)

項 目		調 査 名	本研究の調査結果 内訳 (N=115)	ベネッセ調査 ^{注1)} 内訳 (N=1,007)
性 別	男児		61 (53.0)	534 (53.0)
	女児		54 (47.0)	473 (47.0)
年齢別人数 ^{注2)}	4 歳		5 (4.3)	—
	5 歳		56 (48.7)	—
	6 歳		54 (47.0)	—
兄弟数	1 人		12 (10.4)	143 (14.2)
	2 人		67 (58.3)	631 (62.7)
	3 人		32 (27.8)	205 (20.4)
	4 人		3 (2.6)	21 (2.1)
	5 人		0 (0.0)	1 (0.1)
	6 人		1 (0.9)	0 (0.0)
	無回答		0 (0.0)	6 (0.6)
出生順位	1 番目		54 (47.0)	548 (54.4)
	2 番目		45 (39.1)	357 (35.5)
	3 番目		14 (12.2)	91 (9.0)
	4 番目		1 (0.9)	7 (0.7)
	5 番目		1 (0.9)	0 (0.0)
	無回答		0 (0.0)	4 (0.4)
母親の年齢	21～25歳		6 (5.2)	10 (1.0)
	26～30歳		18 (15.7)	133 (13.2)
	31～35歳		54 (47.0)	466 (46.3)
	36～40歳		26 (22.6)	289 (28.7)
	41歳以上		8 (7.0)	77 (7.6)
	無回答		3 (2.6)	32 (3.2)
父親の職業	会社員 ^{注3)}		88 (76.5)	823 (81.7)
	自営業		15 (13.0)	100 (9.9)
	農業, 漁業, 林業		0 (0.0)	2 (0.2)
	無職		0 (0.0)	1 (0.1)
	その他		6 (5.2)	47 (4.7)
	無回答		6 (5.2)	35 (3.5)

注1) ベネッセ調査は, 2000年2月に東京都, 神奈川県, 千葉県, 埼玉県と富山市および大分市を対象地域として実施されたものである (配布数5,600, 回収率58.4%)。ここでは, 本調査結果との対照として用いるために, 幼稚園児を持つ保護者1,007名の結果のみを抽出した。

注2) 年齢別人数は, 平成18年2月時点のものである。

注3) 「会社員」とは, 会社, 学校および官公庁に勤務している者を指す。

番目」39.1% (同35.5%), 「3番目」12.2% (同9.0%) とほぼ類似する傾向を示し、これら三者で対象者の90%以上を占めていた。性別については、男児53.0%, 女児47.0%と男児がやや多く、全国調査と同じ比率を示した。「兄弟数」は、「1人」10.4% (ベネッセ, 14.2%), 「2人」58.3% (同62.7%) を合計すると約70%程度となっており、「3人」が27.8% (同20.4%) とやや高い比率となっている他は、全国データとほぼ同様の傾向を示していた。なお、本調査の年齢別人数割合は、「4歳」4.3%, 「5歳」48.7%, 「6歳」47.0%という結果であった。

以上、調査対象者の基本的属性を全国データと比較すると、本研究における対象集団は、母親の年齢、性別の比率、兄弟数、出生順位においてほぼ平均的な分布を示し、特殊な偏りのある集団ではないと推察された。

2. 調査方法

質問紙の内容は、母親の養育態度および心理社会的要因に関する項目等により構成した。また、母親には日誌形式による子どもの1週間の生活記録(2月22日~28日)をつけてもらい、その記録をもとに平日と休日の起床・就寝時刻の平均値を算出した。養育態度調査票は、「あてはまる」(4点), 「ややあてはまる」(3点), 「あまりあてはまらない」(2点), 「あてはまらない」(1点)の4段階評価で回答を求めた。

3. 調査対象地域と幼稚園の概要

調査対象となった幼稚園のあるT市は、兵庫県の南東部に位置し、人口22万人を擁する文化・交通・経済の中心都市である。該当の幼稚園が存在する地域は、T市の北西部に位置するベッドタウンであり、世帯数6,864, 人口は19,060人(平成18年2月, T市調べ)である。幼児の父親の職業構成を全国調査と比較すると、「会社員」76.5% (ベネッセ, 81.7%), 「自営業」13.0% (同9.9%) となり、全国データとほぼ同様の傾向となっていた(表1)。

また、該当の幼稚園は、幼稚園教育要領に基づいた教育活動を展開するとともに、3歳児を対象とした地域の子育て支援事業も併せて実施している。すなわち、本研究における調査対象

は、特別な保育特性や地域特性を有する集団ではなく、わが国の大都市近郊の地域において、幼稚園に通う幼児と保護者のごく一般的な生活状況を有しているものと推察される。なお、当該幼稚園においては、午後の昼寝は実施していない。

4. 養育態度調査票の分析

先行研究⁵⁾を参考に、幼児の健康教育に関する研究者4名により作成した母親の養育態度調査票26項目に対して、主因子法・Promax回転による因子分析を行った。固有値の減衰状況と因子の解釈可能性から2因子構造が妥当であると考えられた。そこで、再度2因子を仮定して分析を行い、0.30以上の因子負荷量を示さなかった9項目を分析から削除し、残りの17項目に対して同様の因子分析を実施した。最終的な因子パターンと因子間相関を表2に示した。なお、回転前の2因子で17項目の全分散を説明する割合は40.6%であった。

第1因子は11項目で構成されており、子どもの気持ちを受容し、愛情欲求に応じてやることや積極的な関与を表す項目が高い負荷量を示していた。そこで、「受容・関与」因子と命名した。

第2因子は6項目で構成されており、子どもの健康や安全・衛生面への配慮、しつけに対する毅然とした態度を表す内容が高い負荷量を示していたことから、「厳格・監督」因子と命名した。

次に、内的整合性を検討するために α 係数を算出したところ、養育態度17項目全体としては、 $\alpha=0.79$, 「受容・関与」因子で $\alpha=0.84$, 「厳格・監督」因子で $\alpha=0.65$ とまずまずの値が得られた。

また、すでに信頼性、妥当性が検証されている「母性意識尺度」⁹⁾を外的基準として相関分析を行ったところ、養育態度全体($r=0.43$, $p<0.01$)および下位尺度である「受容・関与」因子($r=0.47$, $p<0.01$)において、有意な相関関係が認められ、基準関連妥当性が検証された(表3)。

5. 群間の睡眠習慣の比較

下位尺度ごとの項目平均値を算出することに

表2 母親の養育態度の因子分析結果 (Promax 回転後の因子パターン)

項 目 内 容	I	II
第1因子「受容・関与」		
16) 子どもが求めればできるだけ相手をするようにしている	.68	-.09
17) ままごとや怪獣ごっこなど, ごっこ遊びを一緒にしている	.67	-.01
26) 子どもと1対1の接触をするように心がけている	.66	.03
25) なるべく話しかけを多くして, 十分声を出させている	.64	.05
14) いろいろなおもちゃを使って子どもと一緒に遊んでいる	.62	-.04
21) 子どもをだっこしたり, 身体接触を多くすることは楽しいことだと思っている	.56	.08
22) 安定して子どもに肯定的な気持ちを持つことができる	.55	-.04
19) 家の外を散歩したり, 砂場で土, 石, 砂で遊ばせたりしている	.53	-.08
20) 子どもが参加するイベントにはなるべく参加している	.52	-.11
18) 子どもには絵本をできるだけ読み聞かせている	.48	-.01
24) 少し高いところに上がったり下りたり, とんだりして遊ばせている	.48	.00
第2因子「厳格・監督」		
8) 食事の時間をあまり長くだらだらしないように気をつけている	.13	.61
7) 子どもの寝る時刻を決めている	-.13	.59
11) 子どもにはひとりで寝る習慣をつけている	-.30	.56
9) 子どもの健康を考えて室内の清潔には十分気をつけている	.37	.42
6) 子どもの様子がおかしいときには体温を計っている	-.04	.40
5) 子どもの身体に危険なことが起きない環境を常につくっている	.28	.33
因子間相関	.22	

表3 養育態度の下位尺度得点と心理社会的尺度との相関

	養育態度全体	「受容・関与」 得点	「厳格・監督」 得点	母性意識	情緒的支援 ネットワーク
養育態度全体					
「受容・関与」得点	0.904***				
「厳格・監督」得点	0.560***	0.152			
母性意識	0.428***	0.470***	0.089		
情緒的支援ネットワーク	0.201*	0.241**	-0.013	0.287**	

有意差: * $p < 0.05$, ** $p < 0.01$, *** $p < 0.001$

より, 「受容・関与」得点 (平均3.05点 $\pm$ 0.48点), 「厳格・監督」得点 (平均3.19点 $\pm$ 0.45点) とし, 各得点の平均値を境界域として, 「指導的」群 (31名, 27.0%), 「権威的」群 (18名, 15.7%), 「寛大」群 (29名, 25.2%), 「無関心」群 (37名, 32.2%) の4類型に分類した (図1)。そして, 起床・就寝時刻における群間の差異を, 一元配置の分散分析と多重比較 (LSD 法) により比較・検討した。なお, データの集計・分析には SPSS (ver.13.0) を使用した。また, 起床・就寝時刻に関して, 年齢と性別による二要因の分散分析の結果, 交互作用・主効果とも認められなかったため, 全対象児115名を一括して統計処理を行った。

図1 養育態度のスタイル⁵⁾

6. 倫理的配慮

調査は, 保護者に対して研究の趣旨を文書で理解を求めたうえで, 事前説明会において筆者らが口頭で説明し, 十分なインフォームドコンセントが得られたうえで実施した。

Ⅲ. 結 果

1. 幼児の起床・就寝時刻

幼児の起床時刻は、平日が午前 7 時18分±26 分、休日は午前 7 時51分±41分（平均値±標準偏差）であった。一方、就寝時刻は、平日が午後 9 時24分±38分、休日は午後 9 時40分±41分であった。また、起床・就寝時刻の平日と休日との差は、起床時刻が32.3分±33.4分、就寝時刻が13.8分±29.7分であった。さらに、平日および休日における幼児の起床・就寝時刻は、すべての項目間で有意な相関関係を有していた（表 4）。

2. 養育態度の類型別にみた幼児の睡眠習慣

養育態度の類型別に、幼児の就寝時刻を比較すると、平日は群間に有意な差が認められなかった（表 5）。しかし、休日においては、「無関心」群（午後 9 時53分±43分）、「寛大」群（午後 9 時51分±40分）、「権威的」群（午後 9 時36分±38分）、「指導的」群（午後 9 時18分±34分）となり、群間に有意な差が認められた（ $p < 0.001$ ）。また、平日と休日の就寝時刻の差においても、群間に有意差が認められ（ $p < 0.01$ ），

「指導的」群（2 分）は、「無関心」群（22分）および「寛大」群（19分）に比べて、顕著に短いことが明らかとなった。

起床時刻に関しては、休日の起床時刻が、「無関心」群（午前 7 時59分±42分）、「寛大」群（午前 8 時 3 分±39分）、「権威的」群（午前 7 時41分±46分）、「指導的」群（午前 7 時37分±31分）となり、群間に有意差が認められた（ $p < 0.05$ ）。また、起床時刻には、平日と休日の差が認められなかった。

Ⅳ. 考 察

1. 親のしつけと幼児の睡眠習慣

母子間の生活リズムの関連を調べた松村⁷⁾は、朝型の母親には朝型の子どもが多く、夜型も同様であること、母親が子どもの生活時間を規制している場合、母子の生活リズムが一致する傾向があると報告している。子どもを寝かしつけるためには、「入眠儀式」⁸⁾という一定の順序と、ある程度の時間的ゆとりが必要であるのと同時に、子どもの睡眠に対する親の意識が肝要となる。幼児期は、基本的生活習慣の形成期であり、1つひとつの生活行動を繰り返し反復し、徐々に自分のできるようにしつけていくプ

表 4 幼児の睡眠習慣相互の相関

	平日就寝時刻	休日就寝時刻	平日起床時刻	休日起床時刻
平日就寝時刻				
休日就寝時刻	0.707**			
平日起床時刻	0.449**	0.454**		
休日起床時刻	0.382**	0.435**	0.570**	

有意差：** $p < 0.01$

表 5 母親の養育態度の類型別にみた幼児の睡眠習慣

類 型		A：「無関心」群 [N = 37]	B：「寛大」群 [N = 29]	C：「権威的」群 [N = 18]	D：「指導的」群 [N = 31]	F 値	多重比較
就寝時刻	平日	午後 9 時32分±37分	午後 9 時32分±31分	午後 9 時26分±36分	午後 9 時17分±30分	1.44	
	休日	午後 9 時53分±43分	午後 9 時51分±40分	午後 9 時36分±38分	午後 9 時18分±34分	14.67***	A・B>D
	平日・休日の差	22分±32分	19分±28分	8 分±20分	2 分±29分	4.18**	A・B>D
起床時刻	平日	午前 7 時21分±28分	午前 7 時27分±24分	午前 7 時18分±25分	午前 7 時 9 分±21分	2.64	
	休日	午前 7 時59分±42分	午前 8 時 3 分±39分	午前 7 時41分±46分	午前 7 時37分±31分	3.00*	A・B>D
	平日・休日の差	37分±31分	36分±36分	23分±41分	29分±27分	1.03	

有意差：* $p < 0.05$, ** $p < 0.01$, *** $p < 0.001$

ロセスが、家庭教育の中に位置づいている必要がある。

幼児の生活リズムの健康面への影響について、疲労度の増大⁹⁾や脳の覚醒水準の低下¹⁰⁾につながる可能性があり、ひいては学童期以降の不定愁訴¹¹⁾、睡眠障害¹²⁾、不登校¹³⁾や肥満¹⁴⁾と関連することが指摘されている。さらに、幼児期の睡眠習慣は、児童期以降も継続する¹⁵⁾ことが報告されており、幼児期における望ましい習慣形成の意義は極めて大きいと考えられる。

睡眠文化研究所の調査研究¹⁶⁾では、親の睡眠が規則的な場合は、子どもの睡眠も規則的であること、親の子どもへの睡眠配慮が、寝つき、睡眠維持、睡眠中の呼吸器系の健康度などによって構成された睡眠健康指標に影響を及ぼすことが指摘されている。睡眠障害国際分類(ICSD)¹⁷⁾には、外在因性睡眠障害の1つとして、「しつけ不足睡眠障害」¹⁸⁾が明記されており、これは、養育者が子どもに対して就床時刻をきちんとしつけないために、眠るべき時刻になってもテレビを見たり、ゲームをしたりして、眠ろうとしない症状を呈する障害を指す。ICSDでは、小児の5～10%にこの障害がみられ、学齢期になってからしつけ不足による睡眠障害が生じると、学業成績の不振や不登校を招くこともあるとされている。

2. 母親の養育スタイルと幼児の睡眠習慣

ところで、親の養育態度と子どもの発達との関連をみる研究で広く用いられているものに、Baumrind¹⁹⁾²⁰⁾による養育スタイルの分類がある。Baumrindは、母親の子どもに対する考え方や直接的な接し方を包括した養育態度を重視し、それを構成する要素として、応答性と統制という二次元の枠組みを示した。中道ら²¹⁾は、応答性を、母親と子どものコミュニケーションと養育から成り、「子どもの意図・欲求に気づき、愛情ある言語や身体的表現を用いて、子どもの意図をできる限り充足させようとする行動」、統制については、養育上の統制と母親の成熟要求から成り、「子どもの意志と関係なく、母親が子どもにとって良いと思う行動を決定し、それを強制する行動」と定義している。

Maccoby & Martin²²⁾は、Baumrindの示し

た概念枠組みをもとに、応答性と統制という2軸をクロスさせて、母親の養育態度を、権威的(authoritative)、寛大(indulgent)、権威主義的(authoritarian)、無視(neglectful)という4つのスタイルに分類している。Lambornら²³⁾の研究では、生徒自身が記入した親に対する養育態度の評価をもとに、14歳から18歳の約4,100名の生徒を、「受容・関与」、「厳格・監督」という二次元の枠組みを用いて、Maccoby & Martinと同様の養育スタイルに分類した。その結果、社会心理的発達、学業成績、内的苦悩、問題行動などの得点から算出した適応指標との関連で、権威的(authoritative)な家庭の子どもが最も得点が高く、無視(neglectful)と分類された家庭の子どもが最も得点が低くなることが指摘された。

本研究では、Baumrindの二次元の枠組みを想定した養育態度尺度の試案を作成し、杉原⁵⁾の分類(無関心、寛大、権威的、指導的、表6)に基づいて、母親の養育態度を類型化した。そして、園での昼寝がなく、母親の労働条件の影響を受けない幼稚園児の睡眠習慣と母親の養育スタイルとの関連を検討した。

まず、養育態度の類型別に幼児の就寝時刻を比較すると、休日において群間に有意な差が認められた。また、平日と休日の就寝時刻の差においても、群間に有意差が認められ、「指導的」群は、「無関心」群および「寛大」群に比べて、平日と休日の差が極めて短いことが明らかとなり、親が子どもの生活時間を強く規制していることが推察された。米山ら²⁴⁾は、食事や睡眠を含めた生活時間の規律性の有無は、幼児の疲労症状の発現と有意な関連を示すと述べており、幼児期においては、1週間の生活リズムの変動幅をできる限り抑えるような生活の管理が必要となる。

一方、「無関心」群および「寛大」群にみられるような、子どもに無関心で放任的な親、もしくは、子どもに愛情をもって接するが、強く要求できない養育態度を有する親の場合には、子どもの起床・就寝時刻とも遅くなる傾向が認められた。すなわち、本研究の条件下において、母親の養育態度のスタイルは、幼児の睡眠習慣に影響を及ぼす可能性が示唆され、子どもを「寝

表6 養育態度スタイルの分類⁵⁾

分 類	説 明
無関心な親 neglectful	両項目とも低得点を取った親。あまり子どもに関心がなく、放任的な親である。
寛大な親 indulgent	受容・関与は高得点で、厳格・監督項目は低得点を取った親。子どもに要求をほとんどしないし、子どもの行った不正行為を非難したり、規則遵守を強要したりもしない。常に温かく許容的である。子どもに愛情をもって接するが、子どものなすがままにする親である。
権威的な親 authoritarian	受容・関与は低得点で、厳格・監督項目は高得点を取った親。この型の親は、子どもに従順、協調、権威への敬意を払うことを強調するが、それに援助や愛情が伴わない。子どもに厳しいが、愛情を伴っていない親。
指導的な親 authoritative	受容・関与項目も厳格・監督項目も高得点を取った親。子どもへの規則を強要し、不正行為への対応では強いコントロールをする。他方、子どもの個性を尊重し、開放的なコミュニケーションを奨励する。温かくて教育的である。

かしつける」ことの意義を改めて確認する結果となった。

平成18年度から、文部科学省の「子どもの生活リズム向上プロジェクト」による全国運動が展開されている。その主な内容には、①ポスター、パンフレットの配布を通した生活リズム向上の普及啓発事業の実施、②親子早朝マラソン・ウォーク、ラジオ体操などの早起き活動のモデル事業、③子どもの生活リズム向上のための全国フォーラムの開催などが挙げられている。プロジェクトでは、子どもの生活リズムの乱れの要因が、「家庭の教育力の低下」であるとしたうえで、「親が親としての役割を果たすようになること」を目指している。しかし、これらの諸事業については、育児の現場で語られる生活実感とは乖離しているのではないかという指摘がある²⁵⁾。

生活リズムの改善は、父親の残業過多や深夜営業店の増加などの外的要因によって、親の個人的な努力だけでは限界があり、母親に過度の心理的負担感を与えないような情報提供のあり方が求められよう。また、本研究の結果が示すように、母親の養育態度は、母性意識尺度⁶⁾並びに情緒的支援ネットワーク尺度²⁶⁾と有意な正の相関関係を有することから、母親が子どもと十分にに関わり、周囲の協力を得ながらゆとりをもって育児に取り組めるための環境整備やサポート体制づくりについても併せて議論する必要がある。

3. 本研究の限界と今後の課題

本研究では、調査対象が1幼稚園の保護者115名であり、第2因子の信頼性係数が十分な値を示さなかった点を考慮するならば、本調査の結果をもって言及できる範囲には限界があると思われる。南風原²⁷⁾は、有意抽出法を用いた研究において、多様な特徴を持つ標本による追試を重ねることにより、特定の個人や集団に観察される現象が、どれだけ多くの人にみられるのかを検証し、追試の積み重ねによる結果の集積によって、一般化への方向性を示す方法を提示している。今後、本研究で得られた知見をもとに、対象年齢や対象地域を拡大し追試を継続することで、一般化が可能な範囲を広げていきたい。

さらに、文献研究により養育態度尺度の構成概念妥当性の精査を行うとともに、調査対象を拡大したうえで再調査を実施し、尺度の信頼性・妥当性の検討を重ねる必要がある。最後に本研究においては、父親の養育態度の影響については考察することができなかった。母親の養育態度に関与する背景要因の分析も含めて、今後の課題としたい。

謝 辞

本調査の実施にあたり、ご協力下さいました兵庫県T市M幼稚園の先生方並びに保護者の皆様方に深く感謝いたします。

付 記

本研究の一部は、平成17～19年度文部科学省科学

研究費補助金（萌芽研究，研究代表者：服部伸一）並びに関西福祉大学地域社会福祉政策研究所のプロジェクト研究助成費の交付を受けて実施された。

文 献

- 1) 服部伸一・足立 正：幼児の就寝時刻と両親の帰宅時刻並びに降園後のテレビ・ビデオ視聴時間との関連性，小児保健研究 2006；65（3）：507-512.
- 2) 鈴木みゆき・高橋千香子・野村芳子他：現代の親子に対する保育者の意識に関する研究—睡眠覚醒リズムに関して—，小児保健研究 2002；61（4）：593-598.
- 3) 辻 新六・有馬昌宏，アンケート調査の方法，初版，東京：朝倉書店 1999；116.
- 4) ベネッセ教育研究開発センター，第2回幼児の生活アンケート 2002；169-170.
- 5) 杉原一昭：親の養育態度と新しい類型論，新井邦二郎，桜井茂雄，大川一郎編（杉原一昭監修），発達臨床心理学の最前線，初版 東京：教育出版 2005；57-62.
- 6) 大日向雅美，母性の研究，初版，東京：川島書店 1988；135-169.
- 7) 松村京子，児童の生活リズムに関する研究（第3報）—母と子の生活リズム—，日本家庭科教育学会誌 1992；36（1）：81-85.
- 8) 神山 潤，「夜ふかし」の脳科学，初版，東京：中央公論新社 2005；201-202.
- 9) 前橋 明，石井浩子，渋谷由美子他，保育園における疲労の訴えスコアの変動に及ぼす生活条件，小児保健研究 1994；53（5）：709-715.
- 10) 塩見優子，秋山雅美，池本貞子，幼稚園児の生活習慣と身体機能との関係—岡山県下4幼稚園児を対象として—，順正短期大学研究紀要 1991；19：155-165.
- 11) 内田勇人，松浦伸郎，諸富嘉男他，小学生の不定愁訴の背景，小児保健研究 1997；56（4）：545-555.
- 12) 三池輝久，小児の睡眠障害と疲労感，日本小児科学会雑誌 2000；104（1）：1-4.
- 13) 三池輝久，不登校にまつわる小児の倦怠感，ストレスと臨床 2000；8：1-4.
- 14) 関根道和，山上孝司，沼田直子他，3歳時の生活習慣と小学4年時の肥満に関する6年間の追跡研究—富山出生コホート研究の結果より—，厚生 の指標 2001；48（8）：14-21.
- 15) 福田一彦，幼児期から児童期にかけての睡眠習慣・睡眠問題に関する縦断的研究，平成10～13年度科学研究費補助金研究成果報告書（基盤研究C），2002；25-34.
- 16) 睡眠文化研究所，都市生活における家族の睡眠の現状 2003；5.
- 17) 太田龍朗，睡眠障害国際分類，松下正明総編集（浅井昌弘・牛島定信・小山 司他編），睡眠障害（臨床精神医学講座13）初版，東京：中山書店 1999；26.
- 18) 古賀良彦，しつけ不足睡眠障害，松下正明総編集（浅井昌弘・牛島定信・小山 司他編），睡眠障害（臨床精神医学講座13）初版，東京：中山書店 1999；65.
- 19) Baumirind D，Child care practices anteceding three patterns of preschool behavior，Genetic Psychology Monograph 1967；75：43-88.
- 20) Baumirind D，Parenting styles and adolescent development，In J. Brooks-Gunn，R. Lerner & A.C. Petersen (Eds.)，The encyclopedia on adolescence New York：Garland,1991：746-758.
- 21) 中道主人・中澤 潤：父親・母親の養育態度と幼児の攻撃行動との関連，千葉大学教育学部研究紀要 2003；51：173-179.
- 22) Maccby EE., & Martin JA. Socialization in the context of the family：Parent-child interaction，In EM Hetherington (Ed.)，PH Mussen (Series Ed.)，handbook of child psychology [vol.4] Socialization Personality, and Social Development New York：John Willy & Sons 1983；1-101.
- 23) Lamborn SD, Mounts NS, Steinberg L, et al. Patterns of competence and adjustment among adolescents from authoritative, authoritarian, indulgent and neglectful families. Child Development 1991；62：1049-1065.
- 24) 米山京子，池田順子，幼児の生活行動および疲労症状発現度との関係，小児保健研究 2005；64（3）：385-396.
- 25) 母の友編集部，私たちの暮らしのリズムとは，母の友 2006；635：30-47.
- 26) 宗像恒次，行動科学からみた健康と病気，初版.

東京：メヂカルフレンド社 2004；129.

- 27) 南風原朝和. 教育心理学研究と統計的検定. 教育心理学年報 1995；34：122-131.

[Summary]

This study aims to examine the influences of mothers' parenting attitudes on their children's sleeping habits. We drew up a multiple choice questionnaire and 119 participants whose children are from 4 to 6 years old answered it. Mothers' parenting attitudes were classified into 4 groups : neglectful (group A), indulgent (group B), authoritarian (group C), and authoritative (group D). The results are : 1) there is a statistically significant difference in the holiday bedtime between 4 groups

($p < .001$) and Group D children go to bed earlier than Group A and Group B children. 2) there is a statistically significant difference in the holiday wake time between 4 groups ($p < .05$) and Group D children make up earlier than Group A and Group B children, and 3) the difference in bedtime between weekdays and holidays is statistically significant between 4 groups ($p < .01$) and the difference is greater in neglectful and indulgent than in authoritative. These findings suggest that mothers' parenting attitudes influence their children's sleeping habits.

[Key words]

mothers' parenting attitudes, infants, sleeping habits, limit-setting sleep disorder